

日蓮聖人における「即身成仏」の一考察

西 片 元 証

即身成仏とは父母所生身のままに成仏することであり、日蓮教学の母胎とも言える天台法華教学では、円教初住以上の証道を仏として認めていた。それが時代と共に、仏と認められる階位の下限が下り、日蓮以前、既に五大院安然は『即身成仏義私記』の中で理即成仏を主張している。日蓮は未代凡夫の階位を名字即、滅後の五品の初品と規定している。安然の『即身成仏義私記』は、法華教学に則つたものであるから、日蓮の教学において理論上、末代凡夫を仏と考えることに問題はない。しかし、同じ法華教学とは言え、安然と日蓮の教学には当然相違がある。ただ、天台教学のルールを逸脱する名字即成仏を日蓮の思想の中で論ずることに無理の無いことは理解できよう。

さて、ここでは日蓮の即身成仏義を論ずるにあたり、三国四師の一人として位置付けられる最澄の即身成仏思想を参照しつつ考察してみたい。最澄の即身成仏思想は主に、『法華秀句』中の「即身成仏化導勝」に見ることができるとされて

いる。浅井教授は『上古日本天台本門思想史』の中で、「即身成仏化導勝」の内容を次の六ヶ条に要約している。すなわち、「文証」「凡位の尊重」「即身成仏位」「三生成仏」「三密成仏」「内証道」である（同書一八四～二〇一頁）。この六ヶ条は、最澄の即身成仏思想を構成する要素である。日蓮の遺文をこの六ヶ条に対応させることは、日蓮の即身成仏思想を浮彫りにすると思われる。かかる意図の下に日蓮の遺文について考察を試みたい。

まず、文証については、日蓮の經典引用は『法華經』に限り、爾前經に説かれる即身成仏は、全て生身得忍として退けている。『法華秀句』に引用された『観普賢菩薩行法經』すら依用されていない。これは『法華經』のみが純円の經であり、更に日蓮が今円昔円に勝劣をつけていることに依るのである。猶、生身得忍については「内証道」にて触れることとする。又、注目すべきは『大智度論』の「譬如大薬師能以毒為藥等云云」（定遺一七五頁等）と、『法華文句』の「薬草

喩品」釈に説かれる就類種・相對種概念である。（定遺一四五二頁）すなわち、前者は妙の字の功德の一として即身成仏を立て、後者は即身成仏の理論的根拠に相對種を当てている。

次に、凡位の尊重であるが、日蓮において、浅井教授の指摘された仏使の他に、仏子という点も見逃せないところであろう。例えば「妙覺ミョウカク・積尊セキソン・我等血肉也。因果功德インガトクデ・非骨髓ヒコツネツ乎」（定遺七二二頁）又、「今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子となり。我等具縛の凡夫忽に教主積尊と功德ひとし」（定遺六四五頁）と妙法五字を受持した者は積尊に等しいことを述べている。この中「我等具縛の凡夫」は名字即の法華經受持者に外ならないから、日蓮の思想に一生入妙覺の可能性を認められよう。但し、周知のように、妙法五字に具足する因行果徳を受得するのが日蓮の宗教である。「繼シテ紹シテ其跡シテ受得ス其功德ス」（定遺七二二頁）とあるとおり、久遠積尊は因行果徳を与える側であり、末代凡夫は受得する側であると云う關係は、仮に日蓮の思想に一生入妙覺を認めても超越できない処である。信心為本の宗教において、本仏と自己の等同を肯首し得ないのは自然の理であらう。

三の即身成仏位について日蓮には明確なる意志表示は無い。冒頭で概述したが、安然が理即成仏の理論を立てたことを考えれば、特に成仏位を明示する必要は無いとも思われ

る。しかし、遺文の各所に散見する、法華經を持つ者が仏使・仏子であるという言葉は、成仏位の設定よりも、法華經の受持・不受持を問題とするように思われる。最澄の示す初住位は、不退転の意味をも有するが、日蓮の場合法華經受持者が不退転であるとは言えない。この点に成仏位を設定することの無意味な理由が存するのではあるまいか。

四の三生成仏について、日蓮は隔生・現生に関し、何等言及していない。それは先の即身成仏位と同様に、妙法五字を持つ当処を仏と認める為、變成男子・分段身の捨・不捨は問題とならないのであらう。最澄が事相の差別を真如隨緣論でいて、会通していたのに対し、日蓮は「譬如大藥師能以毒スカタス為藥ス申ス・此の一字を心へさせ給たりける歟と見へて候へ。毒と申は苦集・二諦生死の因果・毒の中の毒にて候ぞかし此毒を生死即涅槃・煩惱即菩提となし候を妙の極とは申けるなり。良藥と申は毒の變じて藥となりけるを良藥とは申候けり」（定遺一七五五頁）と差別を超越している。この日蓮が事相の差別を超越していた点に、最澄と異なり三生成仏を主張し、變成男子・分段身の捨・不捨を論ずる必要性の無い理由を見い出せる。

三密即身成仏については、日蓮は密教即身成仏義を批判しているから、その実践論たる三密も認められないところであらう。しかし、必ずしも日蓮に三密的要素が無いとは言いき

れない。ここで言う三密的とは、身口意の三業に亘る法華經受持のことである。例えば「此の三の大事は日蓮が申したるにはあらず。只偏に釈迦如来の御神我身に入、かわせ給けるにや」(定遺一〇五四頁)と意業の面があり、又、「法華經と申は手に取れば其手やがて仏に成、口に唱ふれば其口即仏他」(定遺一八九〇頁)と、口業・身業の面が見られる。

最後に内証道については、日蓮も最澄と同様、唯仏与仏の内証の成仏相である。それは、「四聖冥伏、不現妄細尋之、可レ見レ之」(定遺七〇五頁)又、「如ニ堯舜等聖人者於ニ万民ニ無ニ偏頗。人界、仏界、一分也。不輕菩薩於ニ所見人ニ見ニ仏身。悉達太子自ニ人界ニ成ニ仏身。以ニ此等現証ニ可レ信レ之也」(定遺七〇六・七頁)と示された通りである。但し、日蓮の即身成仏義が心作仏であつて、身作仏でないと言うわけではない。それは日蓮が生身得忍と即身成仏を嚴密に区別していることより窺われよう。生身得忍とは生身にて無生法忍を得ることであり、『法華玄義』位妙の段に依れば、円教初住に相当し、妙覺にまで通ずる位であるから、最澄の主張する即身成仏位と同意である。故に、即身成仏と生身得忍はある意味において同義語と言える。しかし、日蓮は「知者あつて法華經を讚歎して骨の魂となせば死人は人身、心は法身。生身得忍といへる法門是也(中略)即身の二字は色法。成仏の二字は心法。死人の心色を變て無始の妙覺妙智と成す。是則即身成仏

也」(定遺七九四頁)と述べている。生身得忍は心法の成仏であるから心作仏と言える。即身成仏は色心に亘る故、身作仏と言えよう。日蓮は法華經の成仏を生身得忍ではなく即身成仏としているのである。

以上、最澄の即身成仏思想を参照しつつ、日蓮のそれについて考察を試みた。その結果、日蓮の即身成仏義は能開たる今円を説く法華經を依拠とし、その法華經を持つ当処を仏として認めていこうとするものである。換言すれば、法華經受持に即身成仏という意義を付与したものとと言えるであろう。猶、このテーマについては他に当然論すべき問題も多々あるが、それ等は今後の課題としたい。

※引用の定遺は『昭和定本日蓮聖人遺文』であり、カッコ内の数字はその頁数を示す又、註は略させて頂いた。

(立正大学大学院)